

また、令和6年(2024)、博多遺跡群のうち、第221次調査地点で発掘された、11世紀後半から12世紀前半に機能した石積遺構が、鴻臚館に代わる新たな貿易拠点となった「唐房」と一体的に、宋の技術によって築造された港湾施設であると評価され、「博多遺跡」として国の史跡に指定されました。

等高線は現在の地形
2024年度現在の発掘調査地点位置図

福岡市経済観光文化局文化財文化財活用部埋蔵文化財課
TEL:092-711-4667 FAX:092-733-5537
福岡市Webまっぷ(埋蔵文化財包蔵地の確認)
<https://webmap.city.fukuoka.lg.jp/fukuoka/Por>

<https://webmap.city.fukuoka.lg.jp/fukuoka/Portal>

博多遺跡群



博多遺跡群では、博多の国際交流や多彩な都市の生活を具体的に示す遺構や遺物が多数発見されました。

福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

この地域に人が住み始めるのは約2,500年前からで、古墳時代には前方後円墳も造られます。奈良・平安時代になると、役人の帯の飾りや銅銭、墨書土器、中国製の貿易陶磁器、塩や金属加工に関連する遺物も出土するようになり、鴻臚館で行われた対外交易に関連する役所があったと考えられています。



帯飾り・銅銭・墨書土器
これらの遺物は遺跡群に何らかの役所があったことを示すものである。墨書土器には「長官」「官」などの官職を示すものもある。

貿易陶磁器と軒瓦

貿易陶磁器は越州窯系青磁で、鴻臚館での主要な交易品である。遺跡群にも対外交易に関わる施設の存在が想定される。



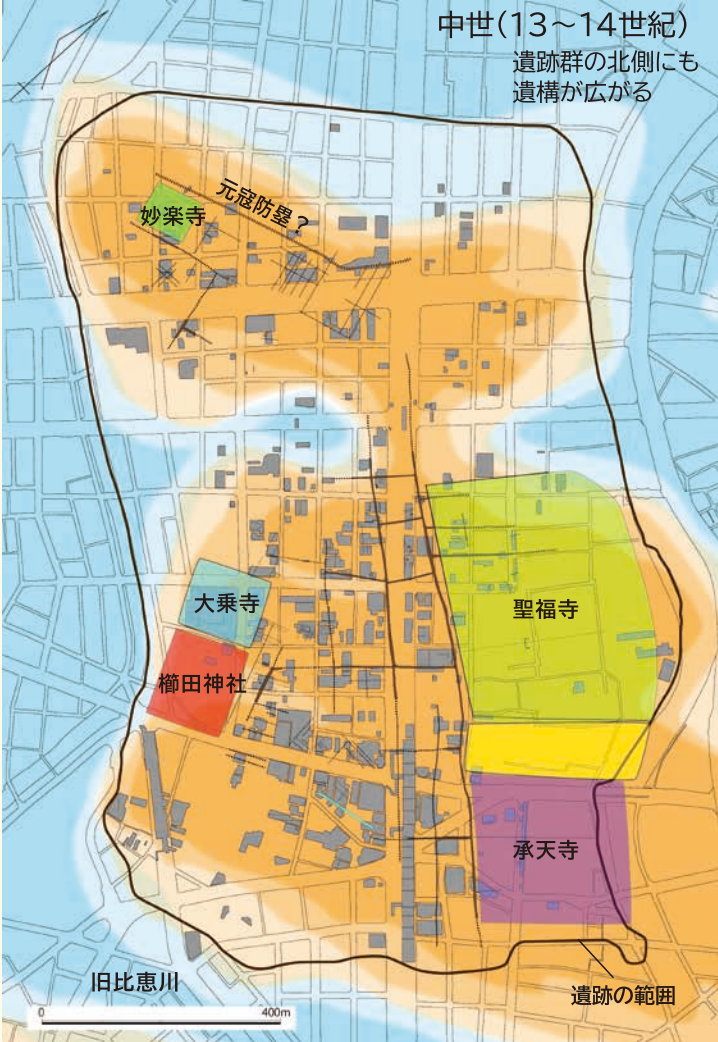
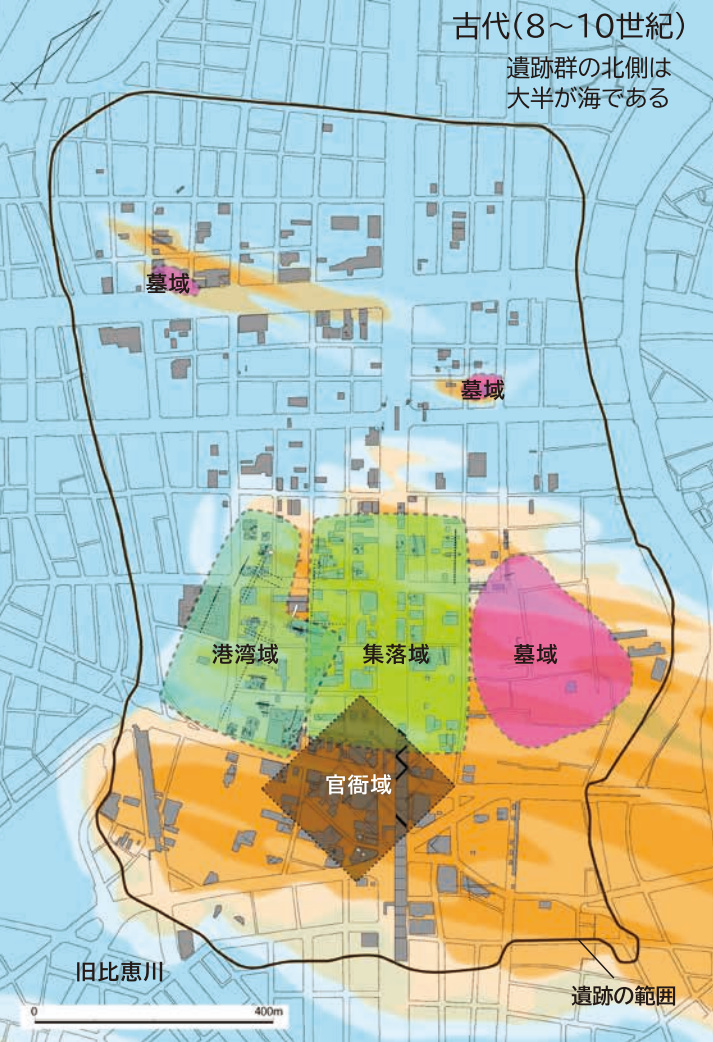
製塩土器と埴塼
遺跡群では塩や金属加工に関する道具も見つかっており、役所などを支える、各種の工房もあったと考えられている。

貿易の拠点が鴻臚館から博多に移った11世紀後半から12世紀前半、博多には宋商人が多く居住していた記録が残っています。また、博多に住居を構えた宋商人は「博多綱首」と呼ばれ、墨書陶磁器の底に見られる「綱」や中国人名は彼らを指すものとされます。彼らの居住区は「筑前博多津唐房」と呼ばれました。冷泉小学校跡地で見つかった石積遺構は、大宰府の管理の下、宋商人が関わりながら、「唐房」と一体的に整備された新たな貿易拠点の港湾施設と考えられています。



石積遺構と交易品(白磁、硫黄)

遺構は当時の水際から6mほど陸側に構築されており、調査では約70mの長さを確認した。幅1.2～1.6m、高さ40～60cmが残り、川側(西側)の石垣状に2～4段積み上げられる。
輸入品の白磁の底には荷主の商人の名前が記されていた。硫黄は鹿児島の大隅半島から産出したものと考えられ、火薬原料として輸出されたものである。



アジアとの交易で発展した博多ですが、1274年、元の襲来を受けて、海岸線に石塁遺構を築き、防御を固めることになります。その後、鎌倉幕府は元の来襲に備えて鎮西探題を設置して、街並みが整備されることになります。

石塁遺構

北側の海岸線に沿って築かれた遺構。幅約3.5m、延長約53mを測る。規模や構造から元寇防塁の可能性が高いと考えられる。



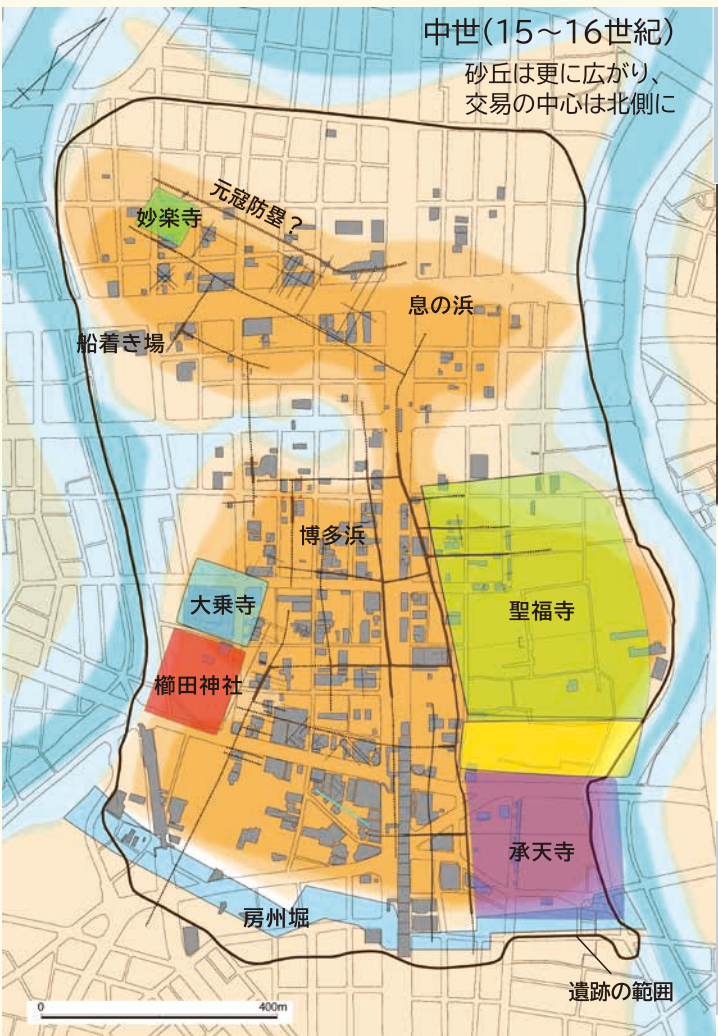
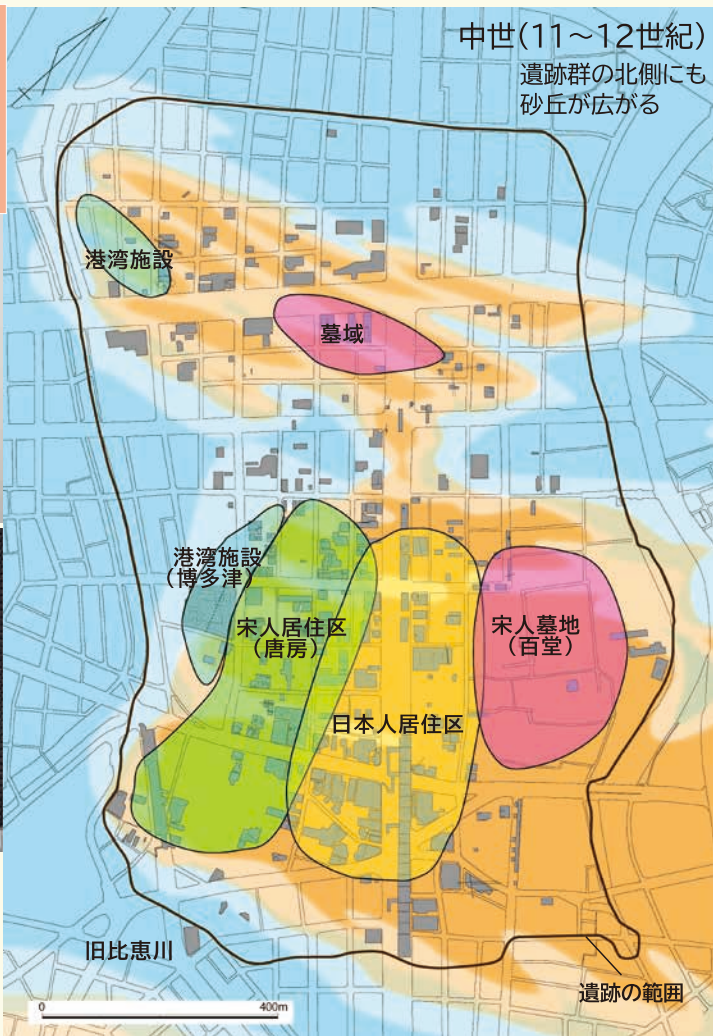
道路跡

14世紀頃に敷設された道路遺構。遺跡群の中央を南北に貫く。幅約5mで、両側に側溝を伴う。かさ上げしながら、16世紀末まで利用される。



人骨の集積

人骨は首や頭の部分で、100体以上に及ぶ。鎮西探題を攻めた菊池一族の首を火葬したものと考えられている。



室町時代以降、博多は日明貿易・朝鮮貿易で栄え、交易の拠点が北側の息の浜に移っていきます。その一方で、各地の大名が交易による利権の争奪するため、博多はしばしば戦火に巻き込まれます。特に、1580年の竜造寺氏による焼き討ちで博多は壊滅的な状況になります。



貿易陶磁器埋納遺構

16世紀中頃の資料で、130点を超える様々な貿易陶磁器が金属製の鍋などとともに、整然と並べた状態で出土。戦火を免れるため、埋めて隠したものと考えられている。



護岸遺構

遺跡群の西側の入り江に築かれたもので、海岸線に沿った護岸や船着き場と考えられている。16世紀から17世紀にかけてのものである。



キリスト教関係遺物

メダイと鋳型。博多を支配した豊前国の大友氏はキリシタン大名として知られ、そのことに関わる資料と考えられている。